911.3
ア

晉書斠注

田善衍 撰

題芭蕉翁國分山幻住庵記

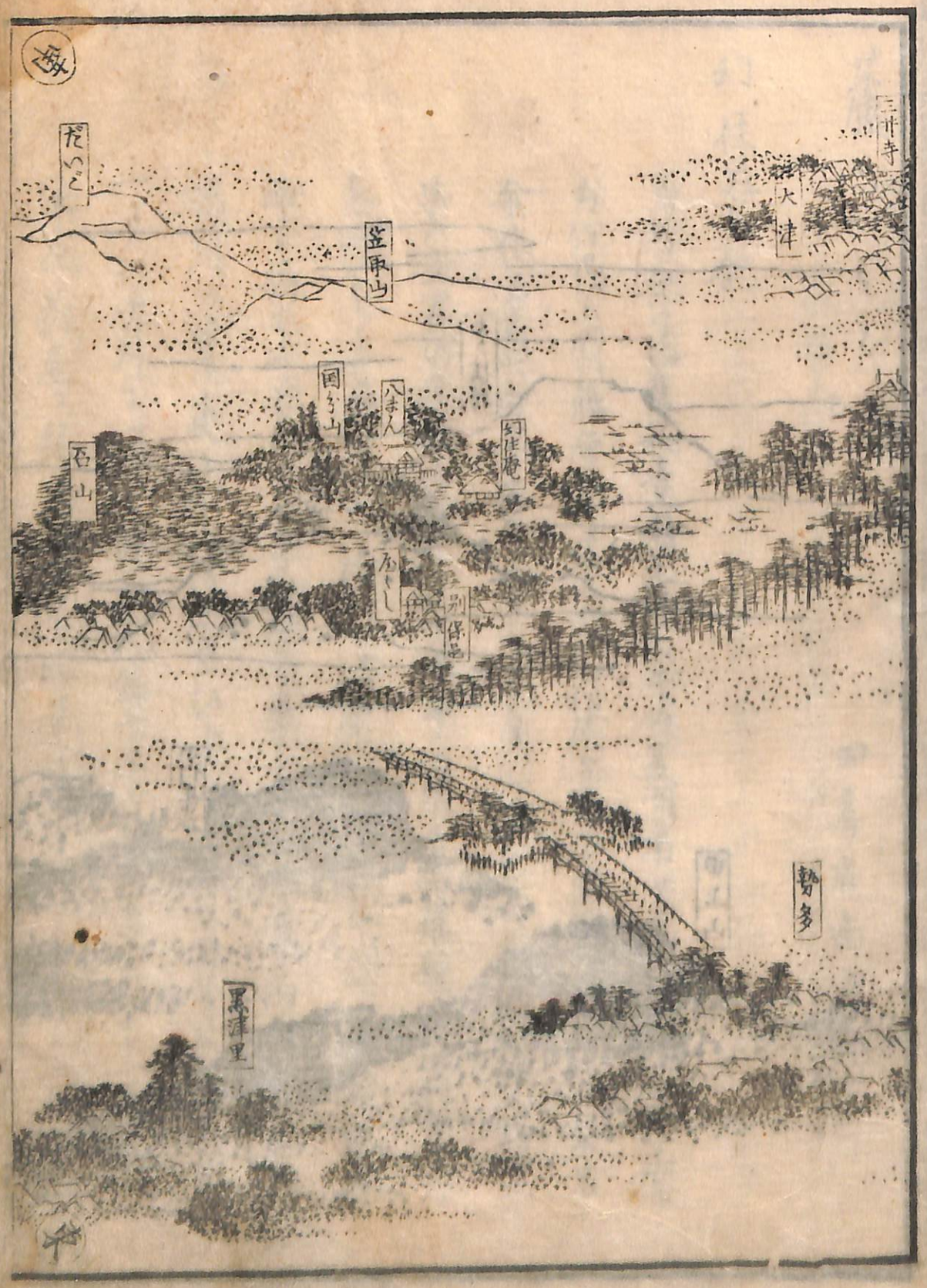
何世無隱士以心隱為賢也何處無山川風景因人美也問讀芭蕉翁幻住庵記乃識其賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相得焉迺作鄙章一篇歌之曰

琵湖南兮國分嶺　古松欝兮綠陰清
茅屋竹椽總數間　内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川　風景依稀入俳城
此地自古富勝覽　今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具艸

右湖南栗津龍岡佛幻菴丈草之章

筠齋紀影書


だいご
笠取山
大津
三井寺
国分山
八まん
幻住庵
石山
石山寺
別保
勢多
瀬田橋

比良山
日枝山
牛尾
義仲寺
亀ヶ岡
矢走
膳所
三上山

蘆の一もと

田喜庵南濤護物輯

幻住菴記

この記は芭蕉扨書翁元録三年の夏湖南ト居の記也芭蕉居士は伊陽上野藤堂某侯の家士松尾与左衛門宗行の子として幼名金作后甚七郎宗房と云尼を羊蹄と云家を嗣て三保の初より生涯主君の早世に遇て寛文六年の頃遁世薙髪して北村季吟を師として風雅の一伝を受常に老荘を愛し佛倶禅師に謁して参禅を事とし東漂西泊して東武深川の草庵に住こと十年水火の難に苦しみ先らまこと一たび古里に帰る後に元録七年戊の冬十月十二日摂陽浪花花屋の旅亭に卒し遺辞に依て骸を江南義

仲寺より葬る續扶桑隠逸傳枯尾花芭蕉繪詞ともいふべし

題号　幻住菴記

江州石山の奥國分山より閑居の折の記ふしぶしかく侍るべし。

二ぶしぶしのりゝ。和漢文藻より云幻住菴の記と云もの三通有記ゝ賦ゝの差別おのゝ〳〵世ゝ公羽ゝ年四十七歳の時也ゝ

是按此説いさゝか遠へゝ奥羽行脚ハ元録二年より四十八歳也

幻住菴の山居ゝ同三年午の夏より四十九歳なる夏〳〵ゝ奥の細道より旅の物うさもいまゝやまぬる年長月六日より也ゝ

伊勢の遷宮おうまんゝゝ又舟より出てゝ有和漢年契より元録

二己年伊勢遷宮ゝ有ゝこの記中より五十年屋近ゝし身ハゝ云云

奥羽象潟の暑き日ふ面を焦しゝゝのゝハ代奥行脚の

後ふして五十歳の前のゝちゝ四十九歳より歳ひ形〳〵幻住

庵ハ瀬田より石山寺ゝ行中程より標石有ゝ後より八丁程有ゝ

其舊蹤ゝつゝ存立せり

庵釈名曰草以為圓居曰菴菴也以自覆菴也

記　説文曰疏也疏謂一々分別ハ記之廣ゝ云記者以備不忘

蓋叙事如書史法也叙事之後畧作議論以結之廣韵曰

記誌也ゝ〳〵史記日記の類ゝ云事を其侭まつ〳〵ねて述る

を記ゝハ云也長明毎名抄より假名より〳〵かくゝる哥の序ハ古今集

假名の序を書ゝハ日記ハ大鑑の大ゝまゝを習ふゝ云云

石山の奥岩間のうしろに住る大いなる石を述てこの記の
はしめ其住居ありしかをよう大概を述こゝ也序文也石山の奥こゝ云ふ
下まてを云歟――さて発語ゝ石山の高い出せるいこの
山ハ湖水第一の風色を統て近江こゝ云ふ歟
をゝ人の陸ゝ ちんやうつハ近江こゝ云ふ石山こゝ書出さる
こゝ又面のもやうふて書ふを考歟――この状況ハ六十帖を
述やるもの山やよりまいこの也是ハ拠り合しての後語歟
岩間山正法寺ハ江州滋賀郡元正帝朝越大徳義澄建立
本尊千手観自在西國順禮第十二番巡拜所也事塵囊
抄草山集第五ゝ詳ゝ

石山ゝ月ゝ
三日月ゝ石山寺のうしろ
石山やをのゝもとゝ
堪ふくや坂ゝもつゝ岩ゝ
國ゝ山ゝふゝのゝ
國ゝ寺ハ聖武帝の草創也今頽廢して跡のこゝ也ハ
山の奥のこゝ
系ゝ
挾持菩薩二軀兼令寫大般若經一部同天平宝字四年
天平應真仁正皇大后光明皇后崩云天平國ゝ寺大后所勧也云云
○元亨釋書以天平九年詔為國ゝ寺摧輿

落乱
尾張 木人
下総 青岐
江戸 雨筐

清青や田子の浦に打出て見れば
雪は降つゝ富士の高嶺に
元正帝昔を思ひ出給ふ
玉ゑ
清瀧の水の流れ
林鹿
三曲二百歩
爾雅曰山未及上曰翠微
微故曰翠微。同疏曰未及頂上在旁陂陀之處曰翠微
一説山氣青縹色故曰翠微也。公羊傳註古六尺為歩三
百歩為里。砂竹抄曰一歩六尺四方也拳足曰跬三尺拳

両足曰歩日本法三尺八寸四方周一尺日本六寸四方也。三曲
八七曲九折
山
八幡宮
の家
麓
八幡宮は國分村の生土神也近津尾八幡宮云。諸神鎮
座之記曰山王七社之聖天子者八幡大菩薩也乃至本地阿弥陀
如来也。淡海志曰近江国滋賀郡壁跡八幡ノ御前八幡大菩
薩者今聖天子是也唐老僧敬聖天子者阿弥陀八幡大菩薩
之分身云云。山王七社之中三神熊聖天子唐老僧敬本地
阿弥陀壁跡正哉吾勝尊法号八幡大菩薩

東見記曰日本神道有三種云唯一宗源唯一之二字二條
院御時雖曰加之但吉田兼延加之以為得其實也云云両部
習合云云本跡縁起此是社家者流禁中謂之日下祓隨
役此外有天子之神道此神道者知之者秘而不言羅山
先生手諾而相傳焉曰理當心地神道也○唯一宗源古来所
傳純一而不雜者也○両部習合自最澄空海始云云○両部
習合弘法傳教慈覺智證佛法附會神道以胎金両
部配于陰陽以佛神為同一體者也○玉勝間採の落葉の
二に云天下の神社のうち神人のそなへる社を俗に唯一といひ
法師のつくる社を両部と云又両部神道と教る一家もあり
両部とハ佛の道に密教の胎藏界金剛界の両部をいふことを
神の道に両部を云ことを
以て神道に合せるを両部習合の神道といふ云々両部を

以て神道に合せるを両部の字をかぶせ神と
佛とを混ずるをいふ両部ハ形式にて又唯一とハ本地神道と
云ことの有よつて其両部をまぜ合せるを
神の道に唯一あるハもとより其名ハ両部神道有
て唯一なしとハ此の名を両部とハ多くハ俗人天人
唯一の義をいひ知るハ僅なり
○老子經 和其光同其塵。和光同塵ハ結縁のまろかれ
ハ謡曲にも云々出たり
日比の人の詠てさくらを花もさいかりさしも社久
老川のかる傍に住すて草の戸にいとも遠根
笹野 をのこと 屋根もと 雫落て 風雅 卯月 変
を 詠ること

日ころハ人の詣てさりけれハいとゝ屋根より軒葺て
と云又勢自然に破屋のさひしきをと云出したるへし
新古今 西行
「ふるはたの昔住けん跡ならて蓬か露に月のかけ清
○発心集ハ何をよしのいのち住なきえすもてと云さしかくれハ何
るゝハ我人の栖家となしあるしハ風に破たる雨よくちぬ
坂京極根取
「南寺の軒の棟たちしハ竹何もて河を杣の下つくろひ哉
寂蓮法師
「人すまて月もすみぬ古寺の程のことをつくろちのもし
きへたる抛去川のあることと云より世を遁れて住たる
く家にかくれもんさなりし下人をしふく先て
幻住庵といふ何のよしの僧何某ハ勇士菅沼氏
曲翠子の伯父になん侍りしをいまハ八とせはかり
昔になりてまさに幻住老人の名をのみ残せり

たゝ是より草庵のさまをのへ給ふの一段を入て幻住の
二字にふかき心を含ませ給へるなるへし ○曲翠子ハ膳所本田侯の家士
なり○菅沼外記と云俳諧ハ芭蕉翁の門人也幻住老人ハ
同家中本多八郎左ヱ門探山居士六十七歳にて卒曲翠子の伯父
なり○諱遂之曰士之行道不得於朝則山林而已山林士之所
獨善自養而不憂天下者之所能安也
予また市中を去る事十とせはかりにて五十年
やゝちかき身ハ蓑虫の蓑を失ひ蝸牛の家をはな
なの身にこる
續隠逸傳芭蕉翁傳曰後遇不幸頻懐出塵志遁世断愛
延宝六年の頃にして三十六歳にして遁世とハいへり
四十九歳の時なれハ五十年やゝちかき身とハ前の十とせ

三、ちんりと云は猫の事なり。この虫は牛のたちおきて旅宿を
ひろひ世をのがれて一所不住のんをきこゆ。枕草子
うち出しあたもとく鬼のうくるまとも枕を似てうまとおそ法
ちんりとは猫をいふなり。古今注曰採蘭雑志曰結草出一名木
蝶一名蓑衣虫へ或云一名結草好殺草末折屈草葉
以為巣窟雷云有之
蓑虫遠京集
蓑ながら今宵枕のうもきて一人ねの心の虫の声
代正
みの虫はさらさら乗もあり泉にはくるもおきし秋の雲の形
ま木集
家を出ぬんはおるーうつまるちまの屋くもはつ世望
この虫は葉山のすてーるあるーー重仁
このむしーのうたもさらさら恨まま　完来

みの虫は雲をあるはるはるはるる　佐夫
はるこうもも山のゆうれうつるる　一具
蓑虫のゆのうあるつるんるるの屋　多代女　武花
うううはるはるや嵐のうのうの恨牛　青隠
うううはるはるつるる　湖山
うのむーはのうるるゆうの秋　富女　信法
うはうはるはるゆうも　恨牛　亀丈　下毛
うの虫や百代うううの家　月主　江戸
蓑虫の枝をはーー出る景の恨　砂粒
うう虫は這うもはるる柱哉　阿悲
奥羽象潟のはつるるよおもてを大うーー言すると
あゆるるるーるる北海のはるる飛を蹴を雄を

[illegible]の田植牛よりまさる人あるこゝを述る又後おもて

同廣時（光俊）石浦のうらうらに近ゆきしかのゆくへもしらずかなしく

○嵐の関より紀ノ親忠の墓を経て市振の関を傳ひ

九十余里海辺の陸道より出て裏日波を焦し夏月波荒て

いとむしかりしを乗り過し畑道より江山水陸の風光教を傳

てうら浪の方すさをもむ又嵐の軍を紀ノ越後の地より

をいでゝ越て越中の国市振の関をいでゝ云々

大ゝ[illegible]鳥のゝ巣の流をゝまし

除魚を芦の一もとの[illegible]けまのあしゝ彩情ふかきにゝめ

恒根猪をへ求ゝ[illegible]和月のはめいて後をめよ入ゝ

山のやゝ出ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

この一段八草庵より志ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

牡屋根もゝ[illegible]おちてゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

め石山の奥ゝ書出ゝ（拾遺家集）

子ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]（夫木集）

ゝ[illegible]

方丈記大ゝ世ゝ[illegible]

いまゝて五ゝ[illegible]（拾玉集）

[illegible]

湖のゝへ春毎ゝ[illegible]おほろぶ　塩谷　虚白

山ゝ[illegible]ゝ湖ゝ[illegible]千鳥ゝ[illegible]　伊勢　菊所

早乙女の手植ゝ[illegible]湖水哉　同次　珪子

ゝつゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]暑ゝ[illegible]　加賀　木雄

山表の湖水をおつる柳うれ　越後　東我

くつをぬ情や　雑堂

裏店立ちも時雨るる　侍のうち　天涯

つらつら湖水入ぬ清しき　信濃　斗山

うつうつへ鶏いもうとの帰るの秋　新庄　越児

ほの入や湖水の先ぶち朱立　上毛　鶏雨

湖うう汁のいろ花の形　江戸　雪芳

うつうつへ時雨るるもうう鶏のまう　吐山

酒のいるは八幡宮ぬ清巣ぶ　三津人

植田まそう松巣もたして鳴の雨　恒丸

山う汁や菫ひらけう松巣　卧鵬

うう巣まて鶏の神の宮　近江　草也

時雨おく山や清巣ぶ鳴ぶ春　越後　鼎喜

冷の巣あ松汁ふ秋の月　江戸　宇右

芋ふ山や冷のう松巣ぶ様ぶる　一貞

さたのよ春の花ぶや遠う浜　鄙躍浮ぶ山蔭

松ようう花ほう山ぶ春ぶ　陳彼宿かう

ぶうう春へいうう水ぶう　おつう冊いう

ぶうう春ぶ奥ぶう

六花う四方の景色を遠て三限の文章を起し給ふ

さたのふう陳彼宿かう　幻住庵ぶ伝初ぶ春ん

云はうたうふくうう春ぶの方丈記ぶ巣ぶ巌浪を

う陳紫雲のめうう西の方ぶ角ふ夜ぶ時雨をきく

かうふ毎ぶ春ての山波を繋るうう云云。狭衣蔭ぶ松

みるめくおもて涼しうてあちら哉

秋放亭集

蘆の葉に汀ようろうきこもるや

○擅鳥とらぬものゝ文鶯のすを宿かしきるとも

山家集

山をみ花をみつくして日ハ宿かしもの春さるに

いそより

新古今　俊成

射ちてこゝも志る波の宿世の宿の鶯

鶯の雛さめの時かは清しいる　上毛　両賀

日八宿の光りもかはつし咲　越後　卓二

谷より川露やうつして合へる山つゝし　国長　山柳

一すぢのくもに光りつゝ許花　京　千崖

摘草しや菜しく蔭みて浮水　かゞ　遊水

蘆の露京へ三里をうまるめし　武蔵　笛亭

ふち咲や高瀬清らつく川ふち　江戸　雪翠

虫そく水のそつろや荻のちる　杜来

坂より川のそゝろ岸や蘆の花　万里

山葉や門を出ろゆく時鳥　揮良

昔よりそうの宮が浦ともそ涼　岱音

罾鹿家鵝そよ来し打る清　京　十丈

鳴時ハ何の苦も淋し郭公　佐右　蔵六

屋の株秋草の錢きや杜鵑　近江　栗三

杜宇きくしくは浪の声は夕暮　伊勢　淇石

国蛍あつや東花しつ楚青　信濃　可厚

馬羽膏の古ろ摘まもと浮、　一桃

子規おけるもの[illegible]ぬてまの形　相模　又也

うゑまさ吟て仕舞や杜鵑　下総　林風

かゝる栗芽吟やゝ[illegible]を山傳　江戸　三鴉

二の巻ハ[illegible]ハ[illegible]ぬ胃竟、　山峰

時雨おくや[illegible]田の[illegible]、　雪濤

おくゝ蜜ゝて走まゝ[illegible]郭公、　鶯笠

木つゝやゝ何の味ひる山木京　開更

木咏やゝ柳さゝもおとゝ　兵庫　吐月

[illegible]の柳[illegible]　武蔵　朽掘

[illegible]ゝやゝ柳の若　江戸　里湖女

[illegible]ゝ山の[illegible]　文口

竟ハ瀟湘洞庭よりも

山ゝ[illegible]人家ゝ[illegible]

南薰峰よりお[illegible]風海を[illegible]

杜律　以病杖塞在峽中蕭湘洞庭虛應空楚天不斷四時雨巫峽長吹萬里風。呉楚東南割乾坤日夜浮。○の圖ゑ山ハ山城近江の境ゝまゝ笠取張嶺ゝ[illegible]東南ゝ[illegible]

ゝ呉楚東南ゝ[illegible]

ゝ止觀四百路遥若遠分衛勞坊若近人物相喧不遠不近乞食

便易下畧の南薰ハ南風ゝ家語曰舜彈五弦之琴操南風之

詩ヲ注曰南風之薰也唐太宗詩薰風自南來殿閣生微涼呂

氏春秋曰東南之風ヲ薰風

[illegible]ゝ味[illegible]

士朗

流しまは京を特くくを峰
草まは夕ぎくく　信濃　雲布　加竜
苔いろくくの山ろの蔓ぐさ　下総　清容
蔓ろ生れるともろる松葉掛　田美

比叡の山比良比高根より辛崎の松ろ霞ろめて

舊事記ま日枝懐風藻ま稈叡山ろ云て麻田連陽春ろ作を
見ると傳教大師ろ比ま叡山を定きしろ元亨釋書東
ま金子山ろ云三代実録ま大比叡神小比叡神ろ云中大嶽を
大ひえろいひ西塔ろ横川の間を小ひえろいへる淡海志ま比叡
山者山城国愛宕郡限峯東方近江西方山城也この山を
桓武帝の勅を奉て延暦七年釈最澄山を開くもろ八日枝ろ
云しを叡慮ま比ぎるの義を以て比叡山ろ改めらる一乗山

観院ろ号ける弘仁十四年額ま年号を勅許有て延暦寺ろ賜
けはろ畧又都の冨士ろも云　拾遺集
ろの意の詠ろ人ま詠ける歌の不見ろいろれまかのを
○比良ろ高もろ山ろて名ろおへる山也比良の大山ろ云ろ
雪の名ろも　万葉集
ろ詠ろの比良の山ろ海ま近ける峯ま袖うへ浜ろ中
○辛崎の松ける史ろこの松菊北三十八宮東西三十間枝ろ四方ま
半ろ色ま青年代亀の松もろ陰ものをやろん　為家卿集
ろ詠ろて昔ろ色ろく朱ま行ろ　もま光太のうろ暁の松
尊朝親王辛崎の松ま記ま詠ろの松ろつたの大風ま吹色
てろはろ心ま詠ろ畧宴ま勅庚後の宮直松ろも畧大津の内
堀郷を所市ぬろ色ろく其はろろ松菴東玉　雑為直寿

とてふさゝ有　畧

風情ある松をとゝ〻くやうて光の雜詠畧

めて拾ふ　畧　于時天正十九年卯の秋の末人もぬさゝゝし

皆枝しゝ

松の門ゝ千ゝ世古法へしゝ蹴の松ふる陰ゝを知るくさく

ゝ雪ゆさて松海ゝの風くゝ生しつさて春ゝ待ぬ梢もとゞ

しほのみゝゝゝてふゝもの根さしゝ、ち老るさし祈ゝ也有ゝく

受えけゝ　ゝゝ

春の雪比叡ハ白ゝ有ゝ紀　ドナ　夢松

雪除雪比叡の山もゝ霞ゝゝ　大梅

賜歌　あゝゝゝは枝ゝ春の郭ゝ　巴生

比良の雪大津の柳　霞ゝゝ　北董

むゝ山ゝ比良の山ゝ雪ゝゝ　眉山

ゝ山ゝ比良の橋ゝ雪　米良

ゝ春の去ゝ　長翠

ゝ跨乃滝ゝ　樗堂

幸家ハ二月ゝ秋の風　壽翁

よゝのゝ二度ゝ夕ゝ　備中　梅價

人ゝ　尾張　掉歌

のゝ　越後　宜長

水ゝ山ゝ　靜軒

霧ゝ畑　弄山

霧ふかく春立ぬとや鶯の
春ふかくなく鳩も草かくれ
うつるはや霞流るる浦の雲　武良　苞竹
さらさらふるしら雪　雪　有臺
かすみたてさむしいとゆる山家ぶし　羅倉
春さえもらて雨ふる篠家ぶし　梅一
夜をこめて家へ行日は霞ぶし　白桂　可景
草の芽よ春の山ふ霞ぶし　久眠　河門

楫のを橋あ家　泊を清水　春笠とりよ通ふ
未撫の春林麓の小田よ早苗とりこ蛍ふ
夕雲の雲よ水鶏の来こ来こ云ふ　明

城八勝州本田侯の居城也。橋八勢多の橋瀬田の長橋とも唐橋
橋とも云志賀郡東本郡の境也長九十七間　巾七間　小橋長サ
七間巾四間中嶋の間十五間合長百九十六間　新古今　医房

桂の板も苔むしくらもるる雨ふる　万葉九
風ふくの初しの山ゆ波ふけ　西行

○笠取山ゆ山城碧湖の東の山也石山ゆ一里近江山城の境
いて岩屋寺ゆ三丁ゆ西也　走本集

三本ゆ見しのゆ雨ふる笠とりの山　西行
風雅集　松葉

笠ゆの山をこのゆ雨かくもるく附ゆ袖をぬらしてゆく

○ふもとの小田よ　山家集

ほとゆ清水ゆ春女のゆ山田のゆ苗ゆまてゆ

○夢　乱ゆ

拾玉集
大井川なつきハ浪よりつゝぬまし堂寂かふゝ夕やゝらの空

○水鶏のなく　山家集　声

杣人のくれにやどかる心地して庵をたゝく水鶏なりけり

○文選謝霊運詩序天下良辰美景賞心楽事四者難
并古今集真名序古天子毎良辰美景詔侍臣預宴
莚者献和哥云々　景色のおもしろきを誉て美景と申
すなり

栄さりしは流ぬ瀬田の橋　素芯

寒さにはいそくは法の勢多の橋　雄咏

稲曳の袖かけ渡るせたの橋　下毛　完爾

雪ならは淡はにはなし瀬田ぬけし　下総　竿丸

木葉つる人の跡や瀬田の橋　駿嶋

三日月や稲をとをえ瀬田お舟　江戸　守橋

燕稲の明ノ舟よりも露を舟　南紀　阜堂

稲に舟のうゆにも舞ふ橋かゝる欤　武蔵　菓二

稲と舟に翠ノの行に家の川　衣月

蝶とめて浮世離れし稲の宗　江戸　雄花

笠とりて松木樵も渡り哉の峰　丹波　沼人

かけ行の山路もとをて霧しまし　浪花　一宵

笠とれや万葉よき山なゆち　江戸　玄渡実

風薫る麦や木樵にまかせけり　越中　本行

ほらなれる木樵のうつや小春山　因幡　雪草

万葉散て情まかせる木樵翁　松夕

本楚人ふる郷人椿の餘業　越後　蓬仙
旅人元日を集家をよふこと　上総　里丸
を嘆や人心荒廃るを苗時　素蘇
雪ふるよ椿ゝの実ゝを苗ゝ　武陵
雪流ゝ出岩屋滝　成美
ほゝほゝの中ゝ幸を入る一雲　保吉
ゝ花ゝを草を殺ゝを行　申之
雪ゝの草ゝ　か賀　年猪
ゝ所ゝ　ぜ水　鶴堂
波ゝ濡ゝ岩ゝを　関良　草雪
雪ゝ花ゝ　近江　志ゝ
蛍ゝ　お模　白玲

荻の根ゝ雪ゝを　江戸　荷心
山草ゝ雪ゝ　玉青
雪雪ゝ　梅丈
蛍ゝ東川ゝ　菊坡
子ゝ葉ゝ　加賀　風芝
ゝ霧ゝ　越后　石海
田ゝ　伊勢　昌作
水鶏ゝ東ゝ　信濃　叢
雨二日水　江戸　一司
水ゝ牛ゝ　草雅
中ふゝ之上ゝ土峰ゝ
古ゝ　椿ゝ

三上山一名百足山山の形富士に似て近江不二と云。三上社
麓の三上村に有祭神天御影命。爲九光栄卿 東路紀行
古てやそ屋ゝるとは行やたゝゝの山もかくもとゝ
不二御覧の記 竟孝法仰
おりゝ不二の根きゝ付をちのくゝかゝの山の陰ぞ
○武藏野の古き掘ゝ八續隠逸傳后到武陵造廬於深川
植芭蕉一株終爲菴名奥細道に去年の秋江上の破屋に
蜘の古巣を払ゝ云ゝ此川の草庵をゝ
やりいてゝきゝ法ゝ

立月庵の目庵ゝ山や三上山　義空長
稲のまゝかゝ今のめゝゝゝ山　月居
雪ゝ降不見ゝ三上山　啓山

田上山に古人をかゝ
ゆゝゝ田ゝ山のゝ
万葉十二
拾六帖
ゝゝ川の
早苗ゝる中ゝ
ゝゝゝ押ゝ
ゝゝ三上山　春路
武蔵　史推

○方ゝ記栗津に系を分て稚九寺の墓を弔ひ田上川をゝ
て稚九寺の墓を弔ひ○毎名抄に人のゝたゝゝ
ゝ云ゝ稚九寺の墓有所の橋のてゝゝの
券よのもゝれてゝれ人もゝ。深草元政の草山集稚九
寺に旧跡を尋る記の中に勢多の橋より南に入山中松下を
出大日山に至り黒津に田上川を渉て関津を過大石に
ゝる橋をゝゝゝ橋答よりゝるゝゝゝの寺有この天の

うしろを廣瀬と云百谷山をうしろにして芳束村うしろ
にて三里余西の方の村うつ一里半ばかり猪九の河を
猪九の嶺と名つく猪九の流れとして書云云喜撰も宇治を
来る宮のやうにうしろ云云この水流石山より入り芳束村
いとゝ猪九の峰を出つゝ西へ〳〵長明の方丈記に
ゝ田上川をうつし流れ一流猪九まで四拾八宇治
田原の禅定寺村の東奥山田より宮ヶ瀬山城近江の国境五
て江戸橋亀へ出るしらぬひと猪九峠と云○田上山の麓より
後頼の古歌にいとゝ名ある人中きし○賀之神あらぶるの官志賀
山の下樹間より宮正光寺村に属そ[illegible]ゆとゝ[illegible]
月影の[illegible]世よりこそ賀之ゝ[illegible]宮ヶ
しめの文ゝ云ゝ[illegible]○黒主社賀之社の志賀の[illegible]
園城寺社地主ゝ[illegible]佐陽[illegible]

田上の[illegible]山もゝち　江ノ　瓢賀
田上ゝ[illegible]
[illegible]野[illegible]
田上ハ[illegible]　下も　月丘
[illegible]ゝ[illegible]
小竹ゝ[illegible]東の方田上山の[illegible]地
名寄集　法九条院
田ゝの[illegible]
千丈ゝ峰ハ[illegible]
高山也○ゝ[illegible]峰ゝ一里南の[illegible]

いづくにか船乗り川をこぎ西の方をあさりゆく
○近江の里は船乗り川の真田上山の梯かけ石山より湖水を
渡りて向也琵琶湖の水黒津石山の辺をへて宇治川へ
流るゝ古きよりいる里の名にて治承保元元弘應仁の乱
の打〳〵度〳〵合戦いづくにか地所も上近江
下黒津とかちて也　田上十八のうち也

寄枕二十三　原俊重

近江のかたのうへ仮寝して近江の里よりかるうれ
日

原俊新

つゝかくのうへは近江はよりもとも下の藻よりまくものそふき
古今歌田上にて向者の歌とあり有法師ハ田家にて藁藉と云る
席をのゝ。万葉記にかるかやを敷て夜の床とする
さゝ生ぬの白よ　笹ゆや近江の柄児う路

夕立や近江の柄吹うへ　士卿　下総

いづくにか吹近江は柄ゆえにかるき　静雄　江戸

芳ゝ日ゆ近江はハなやさ板きう菊　素山

鴨かくやく近江の里ハなやなるを　悪長

いづくにか近江の里ハなやなるを

この一章黒津の烟代の歌万葉集にえらびて法ふ
穿鑿むつかしく諸子稿をとゝのふ古代の萬葉
集よりとゝの説ハいまとゝもの書いまとゝ尽法人なしを
考るよ此章のようと黒津の里ハいとゝ高く歳とて
切てさて何にあるふとゝ後ろん萬葉集のすゝえとゝ
雕章ふとゝうる度一海とゝ家ゝんを身屋一まと

黒津ハ宇治川の上の口なれハ流れて宇治川の氣色を
かへ用ひられしもの流なる歟 宇治川ハ湖水の末にし
て勢多田上桜谷を兼て宇治ニ入と哉

拾玉集　慈鎮

嶋てるや桜谷より落滝津波も花さく宇治のあしろ木

これらもよちつ和歌く万葉集よも宇治の網代の哥有

万葉集七雑

宇治川ハよとせならしあしろ人舟よふなる八遠近きゆ

全

宇治人のたとへのあしろ吾ならハいまハよらましこつみこすとも

西行家集

氷魚よするかはのうへも風寒ぬ田上川にあしろうつらん

また黒津ハ田上十八ケのうちなれハ田上川にあしろを拾遺集
によし堀川百首にあしろ木を田上によし出せしハ万葉集の
すゑとやすよんを寄せしハ彼是の混用ひられしもの歟
なるや田上黒津同し宇治川の流なれハ長いと思う

あはれてハのたる切ハしへ古事不ミる一体の名しいふハ流
歟 萬葉に黒津のうをしハ形容ハ粉ときのひぬ歟
しなるて可なるんれ従の考をまつ

槇の山こゆるあしろのかゝり哉　暁臺

あしろ守たえしはかくもやりつゝ　五明

食をろふ書をに筋のあろ網代守　椿屋

ふ笠の風つもつてあしろ守　兩塘

蒲ふる声の仁さよあし流守　因民　柳茂

うけ傍ざ蒲や月の網代守　雪焦

松かさの落て人なさあしろ守　伊勢　雀豊

そのよへを徳てをしへぬ網代守　越後　笑壺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

方丈記南小仮の日かけもさしいる竹の簀子を敷き西
よ爾伽棚をたてゝ畧東よりに[illegible]
蔵のかたゝらに種のゝけるをりふし山家集よ
引をたゝる焼捨[illegible]
錦繡段地理之部陳元信之松棚詩 定斫松枝架 作棚著
翠如戟 畫崢嶸清陰堪愛 逐堪限遮却斜陽礙月明
杭州鳥窠道林禪師 富陽人也見長松枝葉繁
茂盤屈如蓋 遂捿止其上 故時人謂之鳥窠禪師 元和
中白居易守[illegible]郡時之友也

うの海棠よ巣をいとなみ主簿峰よ菴を結ぶ
王翁徐佺の徒よ[illegible]
山谷詩集 題蕭拳閣 閣在野列提刑司 徐老海棠巣上 元注曰徐佺愛
道隠於藥肆中 家有海棠數株結巣其上時与客巣飲其間
全集王翁主簿拳菴王道人参禅四方歸結屋於主簿拳菴
有毛人至其間問道

唯聯辟山民とかたて屏顔小足を投出——空山よ風を
打ふる庵

睡笠 寐也字彙今睡眠通称 辟匹亦切与僻同偏也只 孫[illegible]
うちかる山人とかたてとおもひめ世法早下の何の宋書云陳摶
隠居花山不仕常喜 鼾睡小睡年年大睡三載云云 屏顔司馬
相如大人賦放散眸驤以屏顔 注屏顔即巉巖蘓軾詩摂衣

歩展顔 注山嶺曰嶺廣白曰淮泗之間謂之顔 展顔[illegible]山
高巍展(サン)セン 説文曰迮一三曰呻吟也○事文類聚捫爰論文王操
隱居華山懷佗世之念植湿入閑掻被縕袍而詣之面拭[illegible]
之支柵毀而言旁若無人湿察而異之○霍林玉露孫仲益
山居上梁文云衣百結之袖納捫毀白加柱九節之鈴送鳴而去
寄語也

形代了風[illegible]流[illegible] 一茶
刈萱よ居るうもきく人[illegible]風 嵐外
連翹ゝ掃出水[illegible]風 茶静
曉ちおほえぬ毒のもくもく哉 蕪
三[illegible]ゝ掃や[illegible]よ[illegible]ゝ猫のそゝ風 上総 角和
[illegible]温石よさくゝ[illegible]ゝ[illegible]風哉 門弟 憑我

入也社掃ゝ帚の木住宿 雪鳥

[illegible]ゝ[illegible]ゝまめ[illegible]谷の清水を汲てゝつゝ
炷くゝとくゝの雫を伐て一燈の侍へいとの[illegible]
方丈記南よ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ら社又隙よく似かり比[illegible]住居の[illegible]也○世[illegible]
芳野西行菴のとくゝの清水を西行上人のゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ人[illegible]
集西行家集[illegible]西行のゝ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]山の井の水
[illegible]ゝ[illegible]ゝ小堀遠[illegible]芳野小[illegible]ゝ舊庵を
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

引くくるる岩の苔清水汲て[illegible]おき[illegible]
るるみのひるるしさ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
云いてるほう一きはかいうるる来る[illegible]
草庵や清水敲て鞠をして　水海
一村の茶くるる清水哉　かが賀　夜鹿
清水まて敷の流ふる山の影ふる　五河　赤穴
ふ入こる草よかふまし清水哉　信濃　玉蓮
くるまれるいきかも流るるるつるる　相模　菊社
葉の葉ふ鞠の流清水哉　江戸　梅塢
草の影岩ふるるる清きるつる　其硯
墓ふるる女清水の筋の一ふる　雪江
渦ふいふし孫の清水て清きふ　元盛

草の戸や薄の穂を若清水　雄峻

たるし昔住り墨人のたるみ人高く住おしけるて
来るるるおけ清水敷家のあるし持佛一間を
屋ふて東ものをるむ人を雲ふるいさるの去
つらんをさ敷を紙業の高良山の僧正加義の
甲冑仏の素ふ厳ふるてるの度沼ふ登るいるるる
ふるるをふるるるるるるる額をいるるるる筆
をるめて幻住庵の三字を彩らる屋て草庵の
かるるるる家しし勇

方丈記ふふ八角の恒ふ文人ふ阿弥陀の畫像を安置し
来てまれるを下器ふを特仏一ふを屋ふるるるる云文隆ふるる人を

○高良山僧正ハ筑後國御井郡高良山僧正諱ハ一如ト云加茂の
甲斐守ハ京ハ城州賀茂社神官藤木甲斐守敦直寛永の頃
の人ニして筆道の達人空海の筆意を学びて門人多し
此向雲竹佐々木志津摩もこの人の門人也小向雲竹俗称ハ
八良左衛門と云蕉翁もまた翁もこの筆意を学てまし
事も有ん○觀ハいま粟津義仲寺の文庫ニ現存す○いまそ
うりてハおそし凌して地

是人や山居ならひ旅ならひ住るならハ夜くもよ
風ならもなし木曽の檜笠越の菅蓑はかり
枕のうへの柱ニかけたら

○木曽檜笠岐嶒志畧ニ檜笠ハ木曽の薮原アラギ蘭村より出村民每
年製ニ十万枚ニ充ニ貢税ニ用し也して桜木笠翁

「木葉ちる桜ハかろしひの木笠　翁○伊勢ての[illegible]
笠も糸行へ化○越の菅蓑金澤の北枝ニおくられし蓑なり
しくれの紀の末ニ贈蓑「白雪とも書ける蓑の中ニ濡れ北枝
「かち人の笠ふる[illegible]古蓑の毛をぬ世ニたくらへん　篤宗ニて
ある買の小笠ニ杜の春川　月　白雄
陽炎や尻ニ發人ニ銃し笠　糸　仙鼻
あしは笠やきの[illegible]山桜　とに　一嘯
と[illegible]蓑もこし[illegible]茶ニ[illegible]　いせ　杉長
このうけ[illegible]翌の[illegible]紫苔　越保　睦堂
笠買くもる人[illegible]柳の[illegible]　上毛　河介
蓑つるす柱ま[illegible]夜[illegible]　信濃　苣丸
人の[illegible]つ[illegible]の笠　相良　薫舒

桜さく頃よりかくれし何の里　江戸 守光

暮かゝし家ハさくらの枕の泉　其山

このゆふし桂よりつる笛の角　梅寿

吉原ちまきしくるゝぬ人くまかくるを願ひけし

何ありてこゝろの翁里の杉の出ても入来ておの光くの

稲くひあらし兎の豆畑にかよひおとろ家中也しぬ

農談日既に山の猿子のくまもき

亀山殿七百首御製

年ふるも八伏猪の床か風くらて列める山欽里の床ゝ秋

○雲谷雑詠　朱梅庵野人戴酒来農談日已ニ夕

猪とも彼東ことしけり兎の秋　蕪村

作文の草も庵ハ兎のくびはし　三ち三彦

猪子ぞとられし也月の秋　蔦三

兎あり雪も解ぬ也けし株　傍奥 野巣

いさよひや兎のかけに戸さくけ　三河 天涯

道もなく涼やかの枝の枝隠　三河 蔦尼

早蕨を新かくしまる兎の菊　下毛 丘我

猪の跡をゆみのゆるまの月　武蔵 与水

田をくふる猪にも肺をも峠　本 圭列

稲かけてしたはぬ杉の寺　三河 世南

咲まるゝ蕎や山田の稲の中　都住 槙充

鼓やいのちもまるき栗の宿　延孫

風の節の通ひし稲の稗かな　五收

早稲の香や猪うちまるてなく雀　下総 秋朝

[illegible]　巣谷
[illegible]　栗守
[illegible]　葉桂
[illegible]　露谷
[illegible]　吐山

夜座去門[illegible]月を待て[illegible]新[illegible]を[illegible]
[illegible]ハ岡雨よ晨[illegible]

○唐詩　夜座不厭江上月晝行不厭江上山
山家集
世の中[illegible]紀[illegible]すむ月の新ハ我身のくゝ地[illegible]
○莊子齊物論曰罔兩問景曰曩子行今子止曩子坐今子起何其
無特操與

名月のおしくもてる涙かな　可都里
鮒鮓や鴨もおつのし[illegible]の月　貞松
雨乃月[illegible]　姜亭
[illegible]ハ世と月と秋と[illegible]　魯仙
月や幼る深山の牡[illegible]水　大鏡
云[illegible]（鮒鮓）一[illegible]月の雨　燈前
霜[illegible]月ハ[illegible]梅[illegible]葉　玉光
[illegible]月ハ[illegible]山の月　蕉雨
[illegible]月の影も幼[illegible]芋の影　田子
山人や身[illegible]月の宿　斗楚
月[illegible]　希拙

月ちもいそ陰くらうやむる氏蔭　双湖

月ゆのいつもとのまをかうけ結ぶ　出羽　元堂

月ゆんとて茅畑へいつる納所う能　岩城　古琴

ちとせ人きんくるゆ物ゆ月　越後　旦翠

道方ゆ月もかうかるる氏冬ゆる庭　不く

庵ゆゆゆて流ん火桶ゆ三日の月、　乙良

ゆゆ留ゆ女房ゆゆゆゆん春の月、　が賀　素竹

流ゆゆゆく船の新ゆ月　信濃　草均

戸ゆ変ゆ蓋のこ月前やかー厠　菖古

ゆゆ一ゆゆ氏ゆすすゆゆの月、　芳江

又ふゆ分松のゆけふゆ月東ゆ　下孫　雅篁

きふの月きつゆゆゆ樹林う能　東里

立ゆ月のゆ休兼ー薄う能　寄船　近江

うのゆゆ能月氏ゆ月ゆ　春里

月ゆを能ゆ春ゆゆ孤ゆ、　茅佛

雨の月ゆゆゆゆ氏ゆ　雨柳　系

江ゆゆゆる月ゆゆゆる月　素童

沙のゆゆ松ゆふゆゆの月　宗常　丹板

いゆゆ氏の雪ゆ筆ふむ嵐う菊　守豊

氏月やゆ氏の月ゆ人月ゆ　丹宿　岡石

月の草ゆゆゆゆゆゆ　寸風

かくいへゆゆて氏ゆ永ふる雨寂ゆゆゆ

くゆんゆゆゆ氏ゆ氏ゆ病身人ゆ僧ゆゆ氏ゆ

人に似てつら／＼年月のうつりこし拙（借）
なき身のとが（科）のほどをおもふにある時は仕官懸命の
地をうらやみ

これより流通の文段也山林に住むことをかくせんとするにはいはれ
とは始のやうなれどもしかしいはれぬことなれば心を猜へ世を背
人に倦てはいまだ俗をはなれずして世を厭ひし人の
似たりといへども幻住庵人のこともいふに対をなして
手段のうちにつりあはせ述べて市中をたちさりて
十とせばかり江戸に連続せしが○續隠逸傳芭蕉翁下に
仕府主君而有忠勤学才秀発其先禅吟公の庵従
まりし時主君の早世をなげきし仕官をかろんじ抛て遁世
す○懸命の地とは撰集抄武勇の家に生れたるものは鎧服の矢

をたて庭をはなれ三尺の剣をぬいて一陣にすゝみて命をかろんず
なふも名利の勝地の為なりといへり○杜律　為農山澗曲臥病
海雲邊世已疏儒術人猶乞酒銭
ひとたびは佛籬祖室の扉にいらんとせしも
遁世して後常陸鹿島根本寺佛頂禅師に参禅して暫く
禅室に入て息三頓の修行などしてありけるとか
この時に鹿島紀行といふものあり潮来にて本間松江と云
旧友のもとにしばらく逗留して世事に疎く足をとゞめ根本寺へ通ひ
なりしとぞ松江と云は五十賀餞別といふ集に有この五十賀
餞別といふ集は伊賀の古郷へ赴く時の集にして素堂等付
宵水安適の哥有その外嵐蘭素堂杉風枳風嵐竹等良
紙屋嵐雪其角等すべて三十五人有依此吟貞享四丁

卯年のころ也鹿島の一事もその時のころ也

○佛頂禪師ハ其后下野那須雲岸寺の奥ニ山居し給ふ德
五年未十二月廿八日七十六にて入寂し給ふ○惠能禪
師ハ偈ニ吾三十而窺佛祖室

ちらすなかれ風雲ふかぬをせめ花鳥ニ情を労し
ちらすなかれ生涯のはるあるべきを徒ニ無能無
才ゆゑ一節よつぶる

○徒然草 謝靈運ハ法華の華授かるも風雲の思ひ
耽らずして惠遠法師の白蓮社ニ入ざりしを人の莊子叢
生主篇 吾生也有涯而知也無涯以有涯隨無涯殆而已

旅すがら花七日ものこりけり　曰人

春の鳥老とい給はゝ應じ尼　播磨　應尼

まちもとほ春ハ行かぬ家ゆゑ　明石　泥中

名もしらぬ草ゆゑ小まとゐ　伊勢　龍宇

野ゆ山ゆ花ゆ鶯ゆ山ゆ　北条　省吾

ゆ食ふ小社ゆ　仙戸　石二

花ゆゑ散り花ゆ鶯ゆ　信濃　園秋

花ゆゑ散り花ゆ鶯ゆ　常陸　菊節

花の雲　花ゆゑ人流れ　信濃　敬角

五月ハ流れ田ゆ　千葉　語明

とゝ迄もとゝ迄もとゝ　相模　其翼

とゝ迄もとゝ迄もとゝ　尤未

こゝろもなくおもふかなのこしもさ
中納 谷雄

楽天ハ五臓の神をやふりて老杜ハ痩たり
白詩選聞亀児詠詩慵染己酬来詩章携勝支賦李二郎其
李二郎吟大苦年幾四十鬢如霜○三体詩元稹寄楽天詩曰
老逢佳景唯惆悵両地各傷無限神○良基公小夜の寝覚
に楽天と云し人は朝夕詩をよせける故五臓をやふりきて
若くより鬢のかみ白しと語るもはゝかりし也○霍林玉露曰
李太白一斗百篇援筆立成杜子美改罷長吟一字不苟蓋二
公亦互相譏嘲太白贈子美曰借問因何太痩生只為従前作
詩苦苦者譏其困雕鐫也子美懐太白曰何時一尊酒重与細論文細者
譏其欠縝密也

賢愚文質のひとしからさる様もいつまてかまよひし心の
すゑのちかひにやとおもひいてゝしめ
いつまてかまよひし法を始の幻住老人の名をあらためて
とは文質の法にかなへる也○論語雍也篇曰質勝文則野文勝質
則史文質彬彬然後君子 注曰彬彬猶班班物相雑而適均之貌

先生の宿椎の木も何其木立
源氏椎か本いかなる木のもとにや宿の事も尋ね侍らんとて
て略 あはれさもなけきとちきりうつくしくおもひ出て
ほる
もちよるんけれ宿のうし椎かもとも心にしら木の花
万葉集七詠岡
民家のうちつとふ椎まつしきといふ其のかけにきつるかなや
山家集 向峰
あらし吹てなをちるまぬこゝろの宿にも椎の下枝

文政十乗丁亥夏刻成

田書庵儲藏

三都
發行
書林

京都三条通升屋町　中川雲寺文次郎
大坂心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　安堂寺町　秋田屋太右衛門
同　江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同　日本橋通二町目　山城屋佐兵衛
同　壹町目　須原屋茂兵衛
同　浅草茅町二町目　須原屋伊八
同　本石町十軒店　英大助板